

あの日 八月十五日

後藤 卓三 陸士61

ことしもまたあの日がやってくる。あの八月十五日である。昭和20年8月15日、戦争に明け暮れていた我が国がポツダム宣言を受諾し連合軍に無条件降伏したことを「玉音」放送によって宣言し、長い戦争時代に終止符を打ったその記念すべき日である。

当時を生きた人々にとつてはそれぞれの「終戦」があつたろうが、私にも私をめぐるその日の状況が忘れようとしても忘れられない記憶となつて鮮明に残っている。ただ七十余年を経た今、その細部となつと必ずしも明確とは言い難いことも亦事実である。

その日は陸軍士官学校61期生として現在陸上自衛隊朝霞駐屯地になつている埼玉朝霞市(当時は町)の陸軍予科士官学校でその「玉音」放送を拝聴したのである。私達は予科士を卒業すると全員が地上兵科の陸軍士官学校か航空兵科の陸軍航空士官学校のいずれかに進学することになつてしたが、予科士ではこの「終戦」の2週間程前、全員の進学コースが決定し大規模な編成替が行われたばかりであつた。しか

しこの三校はいずれも間もなく同時に廃校となるのである。

その廃校に至るまで予科士官学校の最後処理の責任者の一人としてその任を全うされた竹本修氏の著書「武窓回顧」や同期生達の書き残したものとなども参考にしながらふりかえつてみた。

当日、私達は毎日の日課である午前中の学科が取り止めとなり、全員が正装で本部前の大校庭に整列したのは午前11時をとうに廻つていた。これから何がおこるのかとの思いの中、しわぶき一つ聞こえない時間はどれ位流れたろうか。朝からの夏の太陽は容赦なく照りつけてはいたが、暑かつたという記憶は全くない。私達は牟田口校長以下全員不動の姿勢であの「玉音」放送を拝聴することになつたのであるが、私達生徒の多くはその時点までにはつきり「終戦」を意識してはいたかどうかは今となつては定かではない。

ポリウムをあげたラジオの「玉音」ははつきりと聞き取れる状況で流れ始めたのであるが、それが進むにつれて我が国がポツダム宣言を受け入れ連合国側に無条件降伏するという内容がのみこめてくると私の頬はいつの間にか流れ落ちる涙でぬれていた。「耐え難きを耐え忍び難きを忍び」との放送が流れる頃にはそのすすり泣きはまたた

く間に広がり号泣となつて全体をおおつていた。直立不動の姿勢のまま皆泣いていた。

「玉音」放送終了後、校長はこの放送の意を体して、くれぐれも軽率妄動のないよう気を引きしめ祖国再建の為尽力をするようにとの訓示でしめくつたのである。

私達は隊伍を組んで生徒舎にもどつたが誰もが言葉をつたつたように静かであつた。

竹本修氏によると、この前日、14日の夜0大尉が仙台陸軍幼年学校出身生徒150名を連れて予科士を脱出し、宮城前の広場にひれ伏し、国の前途を思う一念から純情一途の行動に出たが校長も非常に心を碎き、副官を派遣し直ちに帰還するよう勧告し帰校させたという。

8月15日の午後、それまで各人に貸与されていた銃と剣は取り上げられ決められていた日課はすべて中止となつた。指示待ちである。

私達へのその最初の指示は「将校生徒」であることを示す一切の物を消去するようになつたものであつた。この指示は、上衣の襟章や肩章、校名の入つた教科書や教材、ノート、日記などをすべて焼却することを意味していた。それまで夜間、外部への光のものを防ぐために取り付けられていた暗幕は

すべて取り除かれ、各生徒舎の窓々からも煌々と明かりがもれ、窓辺までのびた松の枝々が驚く程あざやかな濃緑に輝くのには私ははじめて気付いたことをよく覚えていた。

すでに、生徒舎の裏手にあつた防空壕は取り壊され焼却炉となり、多くの書類や私達の教科書などいろいろなものが投げ込まれ、時には青白い炎をまじえ、夜になつても赤々と燃え続けていた。これは校内の各処で見られた光景でもあつた。だが最初に出された指示は間もなく取り消され、誰の発想であつたか、焼却をまぬかれた辞書類を近くの小学校に寄贈することとなり、リヤカーに満載し届けに行つたことを覚えていた。

私達の上ののしかかつた一種の虚脱感も、これからおとずれるであろう平和に向かう道のりへの不安さや期待をも交え、今迄のきびしく規制された日常生活に終止符が打たれることへの安堵感にも複雑な思いを味わいつつ日々が過ぎていつた。

「終戦」以来聞くことのなかつた爆音と共に屋外で作業する私達の頭上すれすれに突然飛行機が飛来する。つぎはぎだらけの翼にはわずかに残る日の丸がのぞき打ちこまれた鉄までがはつきりと見てとれるその機体からピラがまかれる。本土決戦にむかつて決起を

うながすものであったと記憶するが直ちにそのビラは学校側によって回収される。

何かの作業で兵器庫の前を通ったことがあった。解放された人口から何気なく中を覗くと、小銃一丁一丁の一部に黙々と鑢かけを続ける数名の人々の姿があった。銃には菊の紋章が刻まれているはずである。あれはそれを削り取る作業ではなかったか。私は思わず歩を速め通り過ぎた。その情景は今でもよく覚えていた。

この頃予科士に在籍する同期生の半数は埼玉県内外各地に演習隊として疎開していた。

8月23日その演習隊の1区隊が川口放送局を襲撃する事件が起った。この事件については無関係である同期生の川嶋岩男氏がその日記で上官からの説明として、次のように記している。

「1区隊長に率いられた第1区隊長は、皇軍決起を全国に呼びかけるべく川口放送局を占拠せんとしたるも、計画事前に察知され、送電を断たれて放送不能となり、田中東部軍管区司令官閣下の説得によつて鎮圧された。1区隊長と同行のK少佐は憲兵隊により逮捕され、第1区隊長は全員振武台（予科

士）本校に帰校を命ぜられた」と。後に日氏はNHKの申し入れに応じ当時を語っている。「私は日本という国は、

皇室があれば必ず立ち直れるという信念をもつていた。しかし、戦争に負けて果たして陛下は裁判にかけられないで済むかということについては、非常に疑念をもつた。もう一度外交交渉をやつて、その確約をとつた上で、降伏するならば降伏すべきだという思いになつていた」と、その旨をぜひ放送で訴えたかつたのであろう。「生徒に持たせたのは空包で放送所占拠は演習だった」とも述べている。

本校にもどつた生徒達は他中隊の生徒との接触を絶たれていたような気がする。

私達の区隊からも脱出者が出た。他隊の者との連絡によるものなのか、いろいろな動きの中、複雑ないらだちがそうさせたのであろうが間もなく帰宅した。彼は罰として営倉（留置所のような所）に入れられた。私達は夜間交替でその不寝番に立つことになつたが、嚴重な格子の向こうの暗やみにうづくまる友に声をかけることは許されない。すぐに出来るさ、がんばれよ、との思いで次番者と交替した。私にとつて営倉の不寝番ははじめてのことであつた。

終戦の日、阿南陸相が自決した。新聞もラジオも見聞きすることのできない私達にはその様な情報はいづれからともなく流れてくるが、教授部教官自

決の報には何か心をしゅんと締めつけられものを強く感じさせられた。

私達は今まで経験したことのない外部と直接つながる門の警備にも立たされた。竹本修氏も「恐ろしいのは米軍ではなく、狂つたような周辺の人達の反動的行動であつた。……」と記しているが、そのような注意を受けての緊張感の中でも、一人じつと立っているとしんと静まり返つた夜空の星々の輝きが目にしみる。当時校内の処々には土盛りをして造られた遙拝所があつた。私達は毎日そこに立つて伊勢神宮宮城を遙拝すると共に遠い故郷の空に挙手の礼で挨拶をしてきたが、あまり手紙のやりとりもしていなかつた実家のことなどが思い出される。水戸も空襲にあつたというが、家族はどうであつたらう。病弱な姉はどうだらうか、静かすぎる空気の中に浮かんで消えた。

離校の日が決まつた。私達はここを去らなければならぬ。8月29日故郷の遠い者から帰郷が始まり、関東地方出身者は最後ときまつた。日を追つて淋しくなる生徒舎の中でその日がやつてきた。

私はもう何時会えるかわからない友と互にそれぞれの住所を確認し合ひ文通や、再会を願つて別れを惜しんだ。ぜひお礼と別れの挨拶をしたかつた中

隊長・区隊長は留守であつた。私は荷物を背負いきれいに片付けられた生徒舎を出、北門に向かう。左手に馬術部が見えてくる。あの何百頭もいた馬達はどうなつたのだらう。馬術訓練の度に私を乗せてくれた「床夕」はどこに行くのだらう。下手な初心者私の手綱さばきにもこともなげにこたえてくれた。おとなしい素直なその馬にはほつとさせられることが多かつた。離れ難い親しみ、そんなものを感じていた。馬術の日が待ち遠しかつたのも温かい思い出の一つである。

北門を出たのは午前10時頃であつたらう。振り返ると人気を失ひ、失うであらう建物の数々が何の変わりもない姿でそこにあつた。「国破れて山河あり」そんな思いがふとよぎる。

激変の半月が過ぎた。これからはどうなるのだらうか。私は何か踏みしめるように一歩一歩最寄り新倉駅に向かつて歩いていった。（人名を記号化筆者責）